

先月号で、ろう・難聴学生の大学における情報保障についてお話ししました。しかし情報保障は大学だけでなく、ろう者にとっては一生続く問題です。特に「働くこと」は、人生の大半を占めます。

昔と比べて、会社で働くろう者が増えてきました。しかし雇用はされても、会社の会議に手話通訳がつく例はまれで、休憩時間にも聴社員と会話は十分に楽しむことができません。情報が得にくい環境のまま、ろう・難聴者は毎日黙々と働いています。

その結果、孤独感や疎外感を感じ、うつ病になるなど、不本意な理由で退職するというケースが増えていることに心が痛みました。また、現在の企業は利益を重視し追及するあまり、ろう者だけでなく聴者にとってもどんどん働きづらくなってきているように感じます。

そこで私は、ろう者と聴者が共に働く職場づくりに積極的に取り組んでいる会社取材しよう、そして、見た人が勇気付けられ、元気になるものにしなさいと思つて「サラリー

マンライフ」を制作しよう」と決意しました。会社取材の中で勇気づけられる出会いがありました。

株式会社デンソー（愛知県）には、約260名のろう社員が働いています。同社の高棚製作所で人事を担当する、中川裕子さんにお話を伺いました。中川さんは、寮でろう社員のお世話をするために手話を学び、ろう社員と共に生活をするうちに手話が上達しました。ろう社員から職場での悩みを相談されるようになった中川さんは、コミュニケーションがスムーズにいかないために、ろう社員と聴社員の間関係がうまくいかないことを感じていました。そして3つの提案をして高棚製作所で取り組みました。

1つ目は講演会。ほとんどの社員は、今までもろう者に接したことがないため、どのようにコミュニケーションを図ればいいのか分かりません。まずは、ろう者のことを知ってもらおうと考えた中川さんは、社内で障害を理解する講演会を開き、ろう社員と手話通訳者に話してもらいました。

2つ目は、聴覚障害社員専用コースの教育。技術を習得するために、ろう・難聴社員を対象としたコースを設け、小型カメラやスクリーンを使うなど視覚的に学べるように工夫しました。それまでは分からないまま、ただ座っていただけだった、ろう・難聴社員は喜び、意欲的になりました。

3つ目は手話動画辞典です。中川さんは、ろう社員と一緒にデンソー専門用語の手話辞典を制作しました。社内のイントラネットで公開すると1カ月で4千件のアクセスがあるなど大好評でした。

これらの施策が風化されないようにするには、制度化の必要があると考えた中川さんは社内研究論文に応募しました。論文は当選、3つの案は制度化され、行事や個人面談などに手話通訳もつづよくなりました。一人ひとりが自分らしく働くことのできる会社が増えれば、一人ひとりが幸せに自分らしく生きていくことができる社会になるのではないかと――この取材を通して、そう感じました。

映画で共に生きる社会を

今村彩子

今村彩子（いまむら・あやこ）

愛知県名古屋市出身。愛知教育大学教育学部卒業。Studio AYA代表。カリフォルニア州立大学ノースリッジ校留学（映画学科・アメリカ手話を学ぶ）。現在、名古屋学院大学、愛知学院大学で講師をする一方、ろう・難聴者を取り上げたドキュメンタリーを制作。国内だけでなく、アメリカやカナダ、韓国など海外にも取材に行く。全国各地で自主上映や講演活動もこなしている。<http://studioaya.com/>

「サラリーマンライフ」

今村彩子監督作品第2弾 文部科学省選定
ろう・難聴者が働いている会社で、聴者と共に働くために
どのような取り組みをしているか取材したドキュメンタリー

